「日々の理科」（第 3107 号）　2023,-2,-7

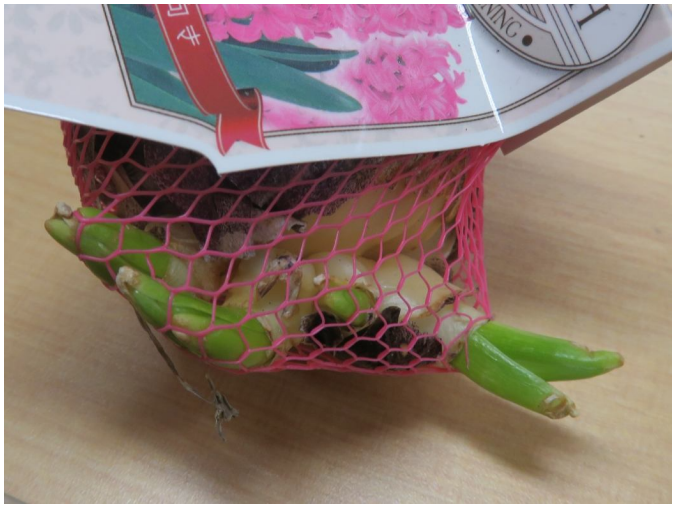
# 「ヒヤシンスの子球（２）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス＆エデュケーション研究所 研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

水栽培もせず、土にも植えずに残ったヒヤシンスの球根。しかし、球根は枯死することなく、生き延びようと必死になっていたようだ。



中には網を破って、いくつも新芽を出しているものもある。もちろん何か月も水も肥料も与えていないので、これらの新芽は、親球根の内部に蓄えられていた養分や水分だけを使って育ったものだ。

この球根からは、頭部からは自身の芽、基部からは新芽が出ている。これが球根でなく種子なら、「発芽の３条件」のうち「水分」を満たしていない。しかし、種子とちがって、球根内に水分を蓄えているので、水栽培も土栽培も「してもらえそうもない」と球根自身が判断して、発芽したのだろう。このまま土に植えたら、どのように育つのだろうか？

基部についた芽の根元にも小さな球根がついている。ヤマユリの「むかご」のような感じだ。これは「子球（子球根）」といって、本来は土栽培の時に形成されるものだ。何もしなくてもできることに驚いた。

この球根は、子球すべてから発芽している。親球根の養分・水分をずいぶん使ってしまっただろう。

私が興味を持ったのは、この子球を土に植えたら、花を咲かせるのだろうか、という点だ。また、子球だけでも水栽培が可能かどうかという点も試してみたい。更に、ヒヤシンスの球根を販売している業者は、どうやってあんな立派な球根を育てるのだろうか？実にさまざまな問いを投げかけてくれた球根だった。